

Special Essay



コミュニケーションのある図書館

寄生虫学講座
井上 雅広

最近、ほとんどの科学雑誌の論文がインターネットを通して読むことができるようになり、私の図書館の利用回数は減っています。10年ほど以前には、図書館で良い論文を見つけるような作業は必須でした。図書館での他の分野の研究者との小声での会話もほとんど無くなりました。そこから、研究情報が得られたり、他の研究者を紹介してもらうことも無くなりました。

確かに情報を得られる速度は、格段に速くなる一方、情報の氾濫により、どの情報を信じ、研究をどの方向に向けるかの判断がかなり困難に成りつつあると思われます。良い研究？とは、「オンリーワンをめざすこと」、と言われてはいますが、情報の氾濫（寄生虫の分野ではそれほど氾濫していませんが、それでも私は情報に流される傾向にあります。）により、オリジナリティのある研究が、ありふれた研究になる危険性が増大している様に思われます。一部の一流の研究者は、「論文を読むな！」とまで言います。これは、実験が主体である我々の研究の場合、「まずメソッドが理解できたらまず手を動かして、データを出し、そこから考えることが大切」と言うことだと私は理解しています。また、一流雑誌の論文のデータ追試がとれなくて困る経験が多々あります。過去にノーベル賞を受賞した論文でさえ、誤っていたことさえあります。他人の特にディスカッションを読むと、そのプロットに沿って実験をする様になり、オンリーワンの論文がアメリカ New England 地方の研究者を喜ばせる論文になってしまう可能性があると思ひます。

さらに、このような情報社会がもたらす弊害として人間のコミュニケーションが欠落することを根底とした犯罪、いじめの増加などがあげられます。携帯電話、インターネットと情報が氾濫している社会、人間同士のコミュニケーションが欠落している社会で、文献を探すだけでなく、雑誌に囲まれた人間同士のコンタクトをとる憩いの場所であった図書館が懐かしく思われます。

幸いなことに4月より図書館3階の元のチュートリアル室を談話室として使えるように変更されたので、他の分野の研究者とも情報交換ができるそうです。皆様も図書館でのコミュニケーションを活用してください。

3階談話室の 風景

